4章　邪馬壱論

南宋『紹熙本』は、1190年～1194年制作の木版本である。宋代は木版印刷が確立し、正史書写の時代から大量印刷へ転換した文化的革命期である。
南宋は、版本『紹熙本』刊行の際、４２９年、裴松之が南朝劉宋、文帝の勅命を受けて注釈した『魏志』を定本としている。だが、『紹熙本倭人伝』の倭国名は、「邪馬壱」である。
１２世紀の『紹熙本』の国名「邪馬壱」は、それまでの正史に一切登場しない。この名は異質異常である。従って、「台」の誤刻説、「台」の誤写説が日本の研究者の間で広く流布している。

＜誤刻説＞

「邪馬壱」という国名は、古田武彦氏が著書『邪馬台国はなかった（1971年初版）』で,「卑弥呼の国名は邪馬台国ではなく、邪馬壱国だ」と主張するまで一般の人々が関心を持つことはなかった。ここから卑弥呼の国名に関する新たな研究が、民間含めて、始まることとなった。
直木孝次郎氏は古田武彦氏の問題提起に答えて次のように述べている。

つまり紹興本･紹熙本は十二世紀の版本であって、それより九百年前の三世紀の終わりにはすでに「三国志」ができていた。九百年ちかくたってできた版本がそれほど権威があるものであろうか。まちがいはたまに起こるものだから、他になくても一度でもまちがいを起こすということはありうることです。他に例がないというだけでは証拠にならない。
そして、五世紀前半にできた「後漢書」には「邪馬壱」ではなく、「邪馬台」と書いている。七世紀の「梁書」も「邪馬台」とあり、「邪馬壱」はない。「隋書」も同様。十世紀にできました「太平御覧」という資料集あるいは百科事典という性格の書物にも、かなり詳しく「魏志」の倭人伝が引用されていますが、「壱」とは出ていない。「邪馬壱」が正しいもので、三世紀にできた書物に「壱」があれば、それを手本にしている「梁書」「隋書」や「太平御覧」にあってもよさそうなのに出てこない。　　『邪馬台国と卑弥呼２』直木孝次郎、弘文館

(1) １２世紀、『三国志』刊本を作った時、「台」の漢字を「壱」と誤刻した。３世紀の『三国志』には「邪馬台国」と書かれていた。『紹興本』は１２世紀に作られた版本である。その版本では「邪馬壱国」となっているが、それは誤刻だ。３世紀の原本では「邪馬台国」となっていたのだ。こういう想定であろうか。
この想定であれば、話は簡単である。倭人は「邪馬台国」と名乗っていた。そして中国側もその名をそのまま受け入れて、３世紀の『魏志』では「邪馬台国」と表記していた。だが、１２世紀、南宋の版本制作者が「台」の字を「壱」と誤刻した。ゆえに、「邪馬壱国」となったのだ、という訳である。

(2) 誤刻説によって、『後漢書』は「邪馬台国」で、１２世紀の版本だけは「邪馬壱国」である理由が説明できないことはない。正しい国名は「邪馬台国」で、「邪馬壱国」は単なるまちがいだと。だが、「他にまちがいがあったから、“壹”もまちがいである。」と云うのであれば、筋は通るが、「他にまちがいはないが、“壹”はまちがいである。」という論は筋が通らない。

では、まちがいを起こすような版本の制作現場はどこか。どこで、まちがいが生じたと考えられるだろうか。

『紹熙本』の制作現場

(1)『紹熙本』において、「壱」と「台」は区別されている。『紹熙本』の最後は、次の文である。

政等、檄(回状)を以て壹與を告喩(こくゆ)す。壹與、倭の大夫率善中郎将、掖邪狗等二十人を遣し、政等を送り還す。因りて、臺(洛陽中央官庁)に詣り、男女生口三十人を献上し、白珠五千孔、青大句珠二枚、異文雑錦二十匹を貢す。

「壹與」は中国側の表記で、日本語では「伊豫」である。「伊(イ)」の音に「壹(イ)」を使い、「豫(ヨ)」の音に「與」を使っている。「壹與」のすぐ後に「臺」の文字が現れる。「臺」は中央政府の役所を意味する。「壱」と「台」は区別されている。
南宋は、『紹熙本』を作ったとき、「台」と「壱」の二つの文字は区別して使っていたと考えられる。『紹熙本』の作成者は自覚して、「邪馬壱」と作ったという結論となる。

(2)『倭人伝(紹熙本)』版工は5人
南宋の学者たちは、まず、定本『紹熙本』を作成した。その本を裏返して版木に貼り付けて彫るというのが次の行程である。『紹熙本』は中央に「魏志三十」「二十六」と、本の名とページが彫られている。各ページは一行十九文字、二十行である。その彫り方は同一ではない。各ページの文字の彫りにはそれぞれ特徴がある。

二十六・・・各文字は四角形に近い。
二十七・・・一つ一つの文字はやや小さい。ゆえ、空白が多いように見える。
二十八・・・各文字は長方形に近い。文字は大きく堂々としている。縦に筋が一本通っているように見える。
二十九・・・横線が細く、縦線の太さとの均整がすばらしく、美しい。
三十・・・・・縦線、横線とも力強くしっかりした文字である。「以」の書体に特徴がある。

『紹熙本・倭人伝』の版木作成には、5人の版工がいたと思われる。いずれも見事な彫りである。彫りは裏返して貼り付けた紙の文字を彫っていくのであるから、この段階で版工がまちがえることは、まず起こりえない。仮に、5人の版工の一人がまちがえたとする。彫りあがると、版木は試し刷りされる。その際、学者たちは、もちろん、版工責任者も一つ一つの文字を丁寧に点検していたであろう。『紹熙本』の文字には『後漢書』のように、「敬」の「はね」を彫り忘れるようなミスはない。
ここで、もし、「台」を「壱」と彫るという重大なミスがあれば、即刻、彫りなおしたであろう。
合格の版木だけが次の印刷工房に回された。また、本を少なくとも千部は印刷したであろう。
読者も千人はいたはずである。版本が「台」の文字を「壱」とまちがっていれば当然指摘される。

『紹熙本』作成過程で、版工が「台」を「壱」と誤刻してそのまま印刷したというレベルのまちがいが起こることはありえない話であろう。12世紀、南宋の『紹熙本』刊本作成学問チ－ムは確信を持って、”邪馬壱”と彫り、印刷し、配布し、天子を初め王朝はそれを了解していた。
「倭国名は邪馬壱」というのが、彼らの一致した認識だったのである。
刊本制作は個人が行ったのではない。南宋王朝の威信をかけた国家事業である。
「誤刻説」は、成立しないと思われる。

＜誤写説＞

三木太郎氏は、著書『魏志倭人伝の世界』において、次のように述べられている。

倭人伝の原本が五世紀に裴松之によって注記されたさい、台が壱に変化したのなら、五世

紀以降七世紀までの史書のうち、倭人伝を直接参照した『後漢書』と『隋書』に壱の記載が表わされるはずだからである。にもかかわらず、両書が台としていることは、七世紀『隋書』の編纂された時点では、倭人伝は「邪馬台」と記されていたことを、はっきりと物語る。おそらく七世紀から一二世紀の間に、台 ➡ 壱の誤写がおこったとみるのが常識的である。

① 5世紀裴注『魏志』の倭国名は「台」である。
② この本を参照した『後漢書』も「台」である。
③ 7世紀、唐の『隋書』編纂時に読まれていた『魏志』でも「台」である。
④ 従って、7世紀から12世紀の間に「台」が「壱」に誤写された。

この誤写説も、日本の多くの研究者に支持されている。

7世紀から12世紀の間に「台」から「壱」への誤写が生じたといえるか？

では、三木氏のように、「7世紀から12世紀の間に台が壱へ誤写された」という想定は妥当であろうか。その根拠は何か。また、誤写本があったとして、南宋は、「邪馬壱」と誤写された『魏志』を定本として刊本を作成したと言えるであろうか。

(1) 魏徴は『隋書』で、「邪靡堆」に注釈し、「邪靡堆は魏志の邪馬台」だと言っている。
7世紀に唐で読まれていた『魏志』の倭国名は、伝統的な「邪馬台」である。南宋は、無論、『隋書』を読んでおり、倭国の首都名は「邪馬台」であることは周知していた。

(2) 中国宋代初期に成立した『太平御覧』に引かれた『魏志』でも、倭国名は、「邪馬台」である。10世紀、宋の太宗の時代、李昉、徐鉉らが見ていた『魏志』の倭国名は、依然として「邪馬台」である。この類書はその後のお手本である。このお手本は12世紀の南宋でも読まれていたであろう。読者は当然「倭国の首都は邪馬台である」と認識していた。

(3) 7世紀から12世紀の間に誤写が生じたと仮定しよう。
12世紀、南宋所有の『魏志』の倭国名は「邪馬壱」だったとする。その時、南宋版本作成学問集団は「邪馬壱」を見て、それが「誤写だ」と見抜けなかったのであろうか。

「邪馬台」と「邪馬壱」とは根本が異なる。「台」は宮殿を表す中国語であるが、「壱」には、中国語で「one」の意味も無く、単に「イの音」の表音文字すぎない。彼らは「台」は受け入れても、「壱」を受け入れることはできなかったであろう。

南宋に「壱」と誤写された『魏志』が存在したのであれば、「台」とした『魏志』が存在したのも当然である。そして、「台」とした本の方が多かったであろう。もし、南宋刊本作成学問集団が刊本『紹熙本』作成の際、どちらかを定本にするか判断したとすれば言うまでもなく「邪馬台」の方である。

(4) 小林岳氏は『後漢書劉昭注李賢注の研究』において、李賢が『後漢書』に注釈する際、秘閣収蔵の范曄『後漢書』と劉昭『集注後漢』をともに底本として相互の校訂をなし、さらに、「流俗本」とする諸本との校勘も重ねて定本『後漢書』を確定し、そこに注釈を挿入して『後漢書』注を完成させたと書いている。慎重に学問的考察を重ねた様子が分かる。定本確定に神経を使ったのは研究者としての本能であろう。

同じように、南宋の学問集団も刊本『魏志』を作成する際、その定本確定に心血を注いだと考えられる。定本は『裴松之注魏志』を底本として、『太平御覧魏志』「流俗本」諸本の校

勘も重ねて確定したに違いない。「台」を「壱」とした「流俗本」があったとして、その「流俗本」を定本とすることがあり得ようか。

刊本『紹熙本』は王朝の書庫に収蔵されるためのものではなく、天子を初め、多くの識者、官僚等の読者を前提にした公の出版物である。その本の中に仮に「壱」と誤刻があったとして、それが見過ごされたまま出版されたと、想像できるであろうか。
そんな単純なミスは起こりえようがないではないか。

(5) 三木氏は、「おそらく7世紀から12世紀の間に、台 ➡ 壱の誤写がおこった」という常識を尊重されたが、この誤写説は日本の研究者がすぐに陥る思考停止といえよう。
壱が出現した理由は「誤写という中国側の人為的なミスだ」としてしまえば、南宋が「邪馬壱」という異質な本を発刊した理由、背景を学問的に解明する必要はなくなり、ここで思考は停止する。

＊ 7世紀から12世紀の間に、「台」から「壱」へ誤写されたという明確な根拠はない。
＊ 12世紀、南宋が定本とした『魏志』が「邪馬壱」と誤写された『魏志』だという根拠もない。
＊ 南宋が「邪馬壱」と誤写された『魏志』をそのまま定本としたという想定は成立しない。

結論
南宋が、「邪馬台」を「邪馬壱」に変更した。

なぜ、南宋は「邪馬壱」と改変したのか

問いが生じる。南宋学問集団はなぜ「邪馬壱」に変更したのか？だが、その過程、その理由を解明できる資料等は全くない。だが、南宋が確たる根拠なしに変更したとは考えられない。
「壱」と作った根拠は何か。王朝はその認識によって名前を変更している。唐は「台」を「堆」に変更した。同じように、南宋も、新たな認識を得て、「台」を「壱」に変更した。このように考えられる。

＜唐の変更＞
倭国への認識は唐において大きく変化している。唐の魏徴は「邪馬台」を「邪靡堆」と変えた。背景に倭国に対する認識の変化があったと思われる。その認識の変化をもたらしたのは、遣隋使、遣唐使である。遣隋使、遣唐使は日本国が派遣した使節団である。日本国は奈良飛鳥に都を置いた日本列島の支配者である。

九州の「倭国」は7世紀の日本列島の王者ではない。現在、日本全体の王は、「倭国」の王ではなく、東の国、日本国の王である。九州の「倭国」は地方国家である。その王の宮殿を、「台」とする訳にはいかない。「邪靡堆」とすべきである。

＜南宋の変更＞
「台」を棄てる原因となった唐の日本国へ現実認識は、南宋王朝にも影響を与えた。日宋貿易の相手は、日本国平氏政権である。南宋学問集団はいかに考えたのか。

5世紀より、倭国の王都を、「邪馬台」と敬称してきた。九州倭国の大王が倭国全体の支配者と考えたからである。だが、唐は九州倭国の王都の名の「台」を棄て「堆」とした。なぜなら、7世紀の日本列島の支配者は、九州の倭国ではなく、東の「日本国」だったからである。我々も、唐の認識に従って、『倭人伝』の九州の倭国の王都を「邪馬台」とすべきではない。

では、王都名は、いかにすべきか。

唐の李賢は、『後漢書』注釈で、倭国の「今名は邪摩惟である」と注記している。これが、7世紀の九州倭国名である。この名が我々が知りうる最新の九州倭国名である。しかも、この名は、7世紀の倭人の生の日本語、自称である。この自称を尊重して、李賢の「邪摩惟」を継承しよう。国名は「ヤマイ」である。

「惟」は呉音では「ユイ」である。「邪摩惟」は「ヤマユイ」と誤読される心配がある。
倭国名は「ヤマユイ」ではない。「ヤマイ」である。誤読をなくすために「惟」は「壱」に改めるべきである。

南宋は倭国名に7世紀、李賢が注記した「邪摩惟」を採用した。そして、国名読みを確固たるものにすべく、どちらとも読むことができる「惟」を捨て、「壱」に変更した。

(1) 南宋は、裴注『魏志』の倭国名「邪馬台」を採用せず、李賢が注記した倭人の倭国名「邪摩惟」を採用した。この判断は、我国を尊重した態度と言えよう。

(2) その際、「惟」を漢音で「イ」と読み、「壱」に変更した。だが、この変更は適切とは言えなかった。「邪摩惟」は倭人の日本語「山結」という意味を持つが、「邪馬壱」ではその意味が失われてしまった。

(3) 南宋は日本語国名を尊重して「邪馬壱」とした。しかし、「惟」を「壱」に変更したため、残念なことに、日本語とは言えなくなった。「邪馬壱」は中国語としても、日本語としても意味をなさない国名となった。
その結果、日本の研究者の間で「誤写」「誤刻」説が流布した。

(4) 明朝『汲古閣本』、清朝『武英殿本』等の版本は『紹熙本』を継承した。ゆえに、全てが「邪馬壱」と作られた。

＊ 南宋は「邪馬台」「邪靡堆」を採らず、李賢注の倭国の自称「邪摩惟（ヤマユイ）」を尊重した。
＊「惟」を漢音で「イ」と読み、「壱」に変更し、「邪馬壱」とした。